

主人の写真に毎日話をします。 幸せだったなと、思い出します

湯河原(ゆうがわ)の里

岡田眞左子様(93歳) 平成2年8月 二人入居

「あの時の苦勞を思ったら何でもできるわね」

日本橋、小舟町生まれの江戸っ子です。東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大) 附属幼稚園に入り、それから女学校まで、ずっと同じ学校に行かせてもらいました。幸せな時間を過ごせたのは両親のおかげです。女学校に上がった年の12月に戦争になり、最後の半年は工場動員され高射砲の信管づくりをしました。3月9日の大空襲の晩は、夜勤をしていますが、東京の下町が焼けてピンク色に染まったあの姿は一生忘れられません。卒業の年の8月が終戦でした。



ご結婚50周年の記念にご主人と(里の中庭で)

幼稚園からずっと一緒に過ごした友達は心の支えです。戦時中の苦勞を共にした固い絆を感じます。コロナ前までは毎年行われるクラス会を楽しみにしていました。

主人は進歩的で「会社を辞めたら老人ホームに入ろう」と

「お茶の水」の同窓会のご縁で、主人とお見合いをすることになりました。お見合いをしてから恋愛したような感じでした。主人はプラスチック材料の製造装置をつくる設計技術者で広島にいたので、手紙でやり取りして東京に来た時に会う、今でいう遠距離恋愛ですね。

主人は「僕は今の二人だけの生活が一番良い。子供が生まれてもいずれば二人になるのだから、このまま二人の生活がしたい。二人で楽しく人生を楽しもう」と言い、男女平等にゴルフも、クルマの運転もさせてくれました。その主人が50歳前後から「会社を辞めたら老人ホームに入ろう」というので、老人ホームの暮らしについてよく話し合ったものです。

「老人ホームの見学に行つて、こないない気持ちで帰れるなんて」

私が60歳の時に体調を崩し、将来に不安を感じた時に、私の友人が湯河原(ゆうがわ)の里の見学を奨めてくれました。早速、主人と一緒に一泊の体験入居の予約をしました。玄関でタクシーを降りまして、主人は海の方を見るなり「なんて素晴らしい所だろう」と、本当に一目惚れでした。しかも、その日のうちに、先輩入居者の方と知り合いになり、翌日には、その方に談話室のコーヒータイムに誘っていただきました。そこには14、5人の方が集まっていて、皆さんが暖かく迎え入れてくださったことは今でも忘れません。満室で見学するお部屋がないというご自分のお部屋を見せてくださいました。お話を伺い、皆さんのこのでの暮らしがわかりました。「満室で空くのは4、5年先です」と言われて待機登録の申し込みをして帰りましたが、主人と帰りの電車で、「老人ホームの見学に行つて、こないない気持ちで帰れるなんて」と話したことを覚えていています。お部屋が空いた時には、まずは主人が契約をし、その一年後に私が契約をしました。しばらくは東京の自宅と行ったり来たりしましたが、その間も、入居者の方からゴルフやバスツアーにお誘いいただいたご親切を忘れません。



主人の思い出とともに

主人を癌で亡くし(享年89歳)私は一人になりました。生前、主人は「人生は生まれる時も一人死ぬ時も一人。一人になった時には、ちゃんと前向きに生活する」と話していました。主人の希望通り相模湾に散骨しました。主人は、残る私が人生を楽しく幸せに過ごせるように、納得させようとしたと思えてなりません。夢にも出てきて見守ってくれています。写真に毎日話をしながら、幸せだったなと思います。

私は、今93歳。曜日毎の予定は、月曜は友人とオセロ、火曜は美容院、水曜はお掃除、木曜はアスレチックジム、金曜はのびのび体操土曜は買い物とカラオケと決まっています。月に一度絵手紙教室にも参加しています。一週間、毎日何かしら目的があるといることが、私の生活の張りになっております。90歳でスマホを始めました。外国にいる姪達にメールや写真を送ると、離れていてもとても身近に感じます。